婦人と新社會

山田わか主筆

十一月號

私の信仰と祈り

新聞の威力

□一國内の王國

□新聞王の背後

□二十世紀の大問題

東京から別府まで

□汽車の中

□神戸にて

□海の上

―編輯の後―

大正十四年十月廿三日印刷納本

毎月一回一日發行　第六十八號　大正十四年十一月一日發行

東京[illegible]婦人と新社會[illegible]發行

私の信仰と祈り

偉大なることに對し熱心になるのはよろしい。けれども、同時に、小さなことに對しても忠實なければならない。

小さなことに對しても忠實であることによつて、この人間界に神の生きた聖靈を見ることが出來る。神の生きた聖靈を現實化することが出來る。そして、これよりも大なる喜びが此の世の中に有り得るだらうか？

宇宙は實に驚くべき眞の詩である。

故に、この驚くべき偉大なる宇宙に對する私共の態度がうすツぺらで輕卒であつてはならない。小さいことの研究のためにも忠實で勤勉であることによつて、大きな哲學が私共を約束の場所へ導いて行つて呉れる。

考へるだけでは終極の目的に達し得るものではない。感じ、生活し、そして、經驗しなければならない。言葉や考へやが足りない時には、人間の創造力と、そして、出來事を經驗しつくすと云ふことが其の足りない處を補つて呉れるものである。

私共は私共が書いたり云つたりしたものよりもより多くを生活しつゝある。で、私共を强くするものは單に書いたものだけではない。私共の幸福なる家庭生活と、私共の努力と、殊に、私共が自分等に忠實であつたことが今後の私共を益々强くする。

そして、これが私の信仰であり私の祈りである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

新聞の威力

一國内の王國

今日の社會に於て、新聞の威力が如何に絶大なるものであるかは一般に認められて居ります實に、或る程度迄は、今迄、一國の主權者、法廷、教壇、又は、演壇が行つて來た勢力に新聞が取つて代つてゐます。

新聞記者は無冠の帝王なりとは今迄は一種の修辭であつたのですが、併し、今日に於ては、それが單なる修辭ではなく、文字通りに現實化してしまいました。

確かに、今日の新聞は一國內のもう一つの王國であります。しかも、それは絶對王國であります。なぜ、絶對王國と云ふかと申ますと、一假今日の文明國に於ては何處の國でも國王の權利さへも制限が附してあります。であるのに新聞と云ふ王國の國王には殆んど何等の制限がなく、その權利は絶對に自由に振り廻はされて居ります。

故に、新聞王なる者が立派な人格者で、正義の念に厚く、公平であるならば、彼は人間生活の發達に於ける無くてならぬ人物です。昔の善良な絶對國王と同じく社會のために大いに有益です。

云ひかへれば、貧富上下の區別なく國民を取り扱ふ時に、新聞は社會の保護者であると同時に指導者であり、文明の建設者です。

それに反して、新聞王の人格が下劣である時には其の害は恐ろしい。暴君の禍どころではありません。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

新聞は、唯、事實を報告すると申ます。けれども、其の事實なるものを誤まつて見てゐる場合もあらうし、又、誤まつて見てゐないとしても、事實の全部を記事にすることは不可能であるから、或る個所だけを選擇する。そして選擇のしようによつては結果から見れば嘘になつてしまう。つまり、主要な點を見損つて、枝葉なことばかり書くと云ふことになると、嘘ではないが本當でもない。そして、讀者に間違つた印象を與へてしまいますから、結果から見れば結局嘘になるし、そして、それは社會のために有害です。

　面白いことには今日の新聞は一方に於ては非常に頑强で、一國の主宰者でも大臣でも富豪でも學者でも何とも思つてゐないと同時に他の一方には彼等が媚を呈さなければならない方面があります。なぜなら、それは今日の新聞に無くてならない方面です。否、それは新聞の生命です。そして、それは廣告依賴人と多數の讀者です。

　ですから、もし、新聞王の無限な權力を制限し得るものがあるとすれば、それは此の方面の人々の意志です。新聞王が社會を益するか、毒するかは其れ等の廣告主と讀者の意志の如何に依ることになるのです。

　處で、廣告主の意志は新聞廣告を通して大衆を利用しようとしてゐるし、大衆は、亦、有識無識のうちに新聞記事を通して自分等の本能の満足を得ようとしてゐます。事實に於ては滿足させられなくても、錯覺によつて新聞紙上で滿足させられることを求めてゐます。否、求めて止まないのです。たとへば、民衆娯樂であるとか、富豪退治であるとか、失業問題であるとか、官營住宅であるとか、普選であるとか云つて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

如何にも無產階級の味方であるように裝ひ、無產階級を喜ばすような記事を選む。かくして、民衆の心を捕へるのですが、これが新聞の威力には無くてならない要素となるのです。

新聞王の背後

しかして、此の新聞王の背後には、いつの間にか、此の新聞王を操縦しようとする者が現れて來ます。新聞王の威力を私利のために利用しようとする者が現れて來るのです。そして、此の新聞王を利用しようとする者の考へを「猶太禍」の著者が忌憚なく云ひ現してゐますから次に御紹介して見ます。

「今日の新聞の使命は何であるかと云ふと、それは國民のうちに烈しい熱情を、時としては、最も利己主義的な黨派心を起させることである。それが我々のために必要である。烈しい熱情を起させたり、黨派心を煽つたりしても、多くの場合共れがからつぽうで不公平で噓であることは勿論だ。けれども、大抵の人々が眞の目的を理解して居はしない。故に、我々が新聞に馬具を付けて、シツカリしたたづなを付けて我々のために利あるように新聞を引き廻はさねばならぬ。同時に、新聞以外の出版物も我々は管理しなければならぬ。新聞だけを巧みに御しても他の出版物を放任して置いたのでは我々の目的は完成しない。

「新聞の編輯人を、先づ、我々は我々の手に入れる必要がある。一體、此の世の中には貴い本能を持つた人間よりも、腐つた本能を持つた人間の方がどんなに多いか分らない。故に、此の社會を支配するに當つては暴力と强迫が最善な結果を齎す。議論などは到底暴力や强迫に及ぶものではない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『どんな人間も、皆、權力を求めてゐる。出來さへすれば、皆、獨裁者になりたいのである。自分の目的を達するために他人の幸福を犧牲に供することを何とも思はないような人間で此の世の中は滿ちてゐる。そして、金力が、今は、何物よりも強い。

『昔は、宗教が世界を統一したことがあつたが實に、自由の觀念なんか到底實現出來るものではない。なぜなら、賢い分別をもつて如何に自由を使用すべきかを理解してゐる人間はめつたに存在しないから。故に、社會を腐敗させるには自治制を與へて置くに限る。自治制なるものは民衆を混亂に陥れる最善な機關である。

『政治に於て我々は如何にして私有財産制を破壞すべきかを知らなければならない。そして、此の仕事は民衆を利用し、民衆の手によつて實行させることが出來る。民衆は野蠻人である。如何なる場合に於ても、民衆は野蠻的行爲をする。故に、民衆が自由を與へられるや否や、彼等は直ちに無政府狀態を現出する。そして、民衆をして此處に至らしむるには、今迄、民衆を制裁してゐた政府の首腦者の威嚴を損ぜしめ、同時に、民衆の私生活を制裁してゐた家庭と云ふ道德の根源を枯渇せしむることである。

『益々盛んに自由主義を皷吹することによつて益々政府は其の威信を落してしまう。從來の一夫一婦の夫婦關係を卑しめることによつて男女關係は亂れ、家庭の威嚴は消滅してしまう。自由主義は民主政治のかたちとなり、普通選擧の形式を通して民衆をして政治に參與せしむることになる。かくして、國家並びに家庭は破壞され、無政府狀態が實現する。それを利用して我々は我々の目的に達しようとするのである。』

（十三頁の下段へつゞく）

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

東京から別府まで

汽車の中

退屈なる場所と云へば雨の夜の汽車の中などは其の優たるものでありませう。その日の夕刊でも見てしまへばもう讀書する勇氣も無く。寢臺券を買ひそこなつた中年の男が座席の傍を急ぎ足に通りがゝるボーイを捕へては「寢臺をどうかして貰ひたい」を繰り返へしてゐます。五六時間の辛棒だのに意氣地のない男だ」と私は心のうちで冷笑する。

やがて有島夫人が「オー、熱い」と仰有つて羽織や足袋をおぬぎになる。氣が付いて見ると夫人の細い體は、大きな私の體の小山と、雨がとび込むのを防ぐためにヒツタリ閉めた窓下の板塀との間にはさまれたと云ふよりも、小山と板塀との間の凹所にポツコリはまりこんで御ゐでになる。私は「ハヽハ」と笑ひながら座席を代つてお上げしました。大きな私の體はか細い夫人が横に居られても空氣の流通には少しもことを缺きません。

九月一杯大馬力をかけて仕事をして置いて十月に這入つたら直ぐ出立しようと云ふことになつてゐたのですがいろんなことでツイ〳〵延び〳〵になつていよ〳〵東京驛から汽車に乗り込んだのは十月九日の夜でした。今度の旅行は可なりな大旅行であるのですが、併し、私の氣持ちは唯「お風呂に行く」と云ふこと、範圍を出ませんでした、石鹼箱を手拭にくる〳〵と包んで五錢玉一ツ持つて近所のお湯に行く時と同じ氣持ちで、ガタンゴトンと云ふ汽車のヒビキを意識する度毎に「隨分遠い、そして、大げさな入浴もあるものだなア」とツク〳〵思ひながら、自分を乘せて遮二無二道を急ぐ汽車の全體の姿を心に浮べて居るのでした。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

寢臺がとれないでやきもきして居た人達もツイにはあきらめて落ち付き、ガヤ〳〵してゐた話し聲もヒソ〳〵話となり、その次にはヒソ〳〵聲もヒッタリと止まり、十二時過ぎになると、ところ〴〵からポカリポカリ煙草の煙が上がつてゐるだけ、かと思ふうちに其の煙も見へなくなり、後に投げかけた禿頭、頬杖づいてガックリ曲げた丸髷、窓枠につッぷした耳かくし、二人分の座席を一人で占めて居る僥幸を利用してひぢかけの上にイガグリ頭をつん出して横になつてゐる人など車中の凡ての人々が『自分の運命は全然汽車にお任せしてあります』と云つたように、又は、魔力をかけられて、もうどうにも仕様がないから觀念して時の經過を待つと云つたように汽車の中は全くヒツソリカンとしてしまつて、徒らに汽車のゴー〳〵がタンゴトンが車中一杯に其の勢力をたくましうしてゐました。

有島夫人は箱がたの空氣枕を兩手を平行させてお抱へになつたり、其の枕の上と下に手をお置きになつたりして、頭を後に投げかけておゐでになるので『一體枕と云ふものは頭へあてるものではないですか？　奥さん』と私は他の乘客のねむりを妨げないようにさゝやきました。『でも、これはゴロ〳〵してゐて駄目ですもの』『それでは、又、窓ぎはにゐらつしやい、私は此處で少し眠れたようですから今度はあなたが此の隅つこに枕をあてゝおやすみになつて御らんなさいな』と私は云ひました、夫人と私は又座席を取りかへて　そして、夫人はもう一度小山と塀の間の凹所におはいりになりました。暫くしてから見ると夫人は向ふむきにかしこまつて頭を低く垂れて背中を丸くして眠つて居られるようで、併し、其處には人が居ると云ふよりも『飾り物の帶がおたいこの形に結んである』と云ふ風に見へるので私は思はずクス〳〵笑ひ出しました。お苦しそうだとは思ひましたが、併し、折角お眠れになつたのにと思ひ直して私は出來るだけ靜かにしてゐました。その『飾り帶式』ねむり方が祟つて後ではヤッぱりお膝のあたりの筋がお痛いようでした。

名古屋を通過した頃、東の空がそろ〳〵白み始めました。乘客の全部を完全に押へ付けてゐたくらやみの魔の手が除々と其の力を失ひ始めたかのように、さち

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

らこちらの頭が少しづゝ動き、もたげられ、ヒソ〳〵聲が始まり、そして、汽車が岐阜に着いた頃には夜が全く明けはなれてしまいました。

くらやみの魔力から全然解放されて車内は急に活氣づいて來ました。揚子を使ふ人、顔を洗ふ人、食堂に急ぐ人、煙草の煙は盛んに上り、高聲の話があちらにもこちらにも始まりました。

沼津あたりから雨を落すことを止めてゐた空は靜かに晴れて、神戸から船に乗らうとしてゐる私達の旅行の前途を祝福してゐて呉れるかのようでした。

神戸にて

大阪商船のむらさき丸が神戸を出帆するのは三時四十分です。三ノ宮で列車を捨てゝ行李の仕末やら食事やらをすませてもまだ約三時間の暇がありました。で夫人と二人で神戸の町を見ながら港川神社に行つて見ようと云ふことになりました。

一體、神戸はガサツと云ふ感じがする――これは船つき場の止むを得ない要素でせうが――のですが、そのガサツな町を縱横に走る電車のあの汽笛はどうしたものでせう。海の上で汽船が鳴らす時はさのみ苦痛にも思ひませんが、狹いほこりッぽい街路を絶間なく、太く大きくポー〳〵やられたのでは實際私共の神經がどうかなつてしまいます。

ゆんべの睡眠不足の頭へ其のポー〳〵を叩きつけられるので隨分不愉快でした。夫人も餘程おつかれになつたと見へて、欠伸の連發が可なり長く續きました。

港川神社の境内の廣いことは嬉しいものゝ一つでしたが、併し、私共日本國民の一人々々の頭に深く〳〵刻みつけられてゐるあの「嗚呼忠臣楠子の墓」の位置はもう少しどうかならないものか。境内の奥まつた個所にいろ〳〵の建物があるので、それよりももつと奥に私共は其の「楠子の墓」を求めても見當らないので通りがゝりの人に尋ねて見ると、何のこと、その墓は境内の入口の片隅の垣一重の外は電車自動車其の他の雜音で喧噪を極めてゐる處にあるのです。昔を偲ばうとしても到底さう云ふ落ち付いた氣分が許される處ではありません。楠公の墓の周圍をこんなことにしてしま

つたのは確かに當局の重大なる失敗であると私は思ひます。

神戸主要な町をブラ〳〵歩いてゐると洋服を着た立派な青年紳士がツカ〳〵私の方へ寄つて來ます。「ハテ見たような方だが」と瞳をこらしてゐると「あなたは山田さんですれ、私は吉田です」と仰有る。「あゝ、さう、あなたは吉田さん！」と叫ぶ。以前嘉吉氏から外國語を習つて居られた好少年が六七年逢はずにゐるうちにガッシリと熟して末たのもしい好紳士になつてゐるのでした。相互の現在の狀態を簡單に語り合つて別れたのでしたが、時間が來て船へ行つて見ると吉田さんの方が先きへ私を見送るために行つて居られて船中で食べる菓子さへ用意してゐて下さつたのでした。

海の上

支那を思はせるようなガヂャン〳〵云ふドラが鳴ると船は除々と棧橋を離れました。船が動き出すと同時に、甲板の手摺りにつかまつてむせび泣ひてゐる髮のまッ白い老婆が不圖私の目に付きました。棧橋の方に目をやると其處に老婆の娘らしい三十前後の婦人が泣き出したいのを我慢してゐるらしく、顔をひッつらして一生懸命老婆を見守つて居るのでした。

棧橋をかなり離れた船はグルリと向きをかへました無數の小船大船の間を縫ふて除々と進んでゐたむらさき丸はうるさい程澤山ある其等のいろ〳〵の種類の船がやうやくまばらになつた頃、紺碧の水を勇ましく切つてとつとゝ進み始めました。

この前私が海上に出たのはいつのことであつたか覺へがない程私は久しぶりに海へ出たのですから十二分に潮風に吹かれる氣持ちは痛快とも壯快とも何とも云へない筈ですが、併し水の美しさよりも、海から見た陸の景色よりも私の心を惹きつゝあるものは先刻甲板の手摺りに泣き伏した老婆の姿です。

で、私はツク〳〵考へるのでした。風景がどうの何が面白いのと云つた處で、人間の心に最もかゝはりの深いものはやッぱり人間であると云ふことを。旅先きで心の温い知人にヒヨッコリ出逢つた嬉しさ、懐しさ又、見ず知らずの老婆だとは云へ、可愛い娘と遠く離

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

れて生きて行かればならぬ憐さ。結局、人間にとつては人間よりも貴いものは何にもないこと、人情より美しいものは外に何にもないこと、愛情のない高樓玉殿よりも親子夫婦の愛情のゆたかな陋屋を人がなつかしむのは當然であることを今更ながら考へるのでした。

　そんなことに思ひ耽つて居るうち船は明石海峡を通り過ぎた。夕日は海の上を金色にやがては樺色に染めてゐました。だん〳〵船が進むにつれて、その夕やけを浴びてニコ〳〵して居るかのように見ゆる左手の陸地は淡路島であるのです。山を背景に立ち並ぶ海岸の人家が一軒々々手に取るように見へ、濱邊で働いてゐる人の姿さへ見ゆるのです。

　地圖の上では日頃氣も付かない程小さな島まるで夢の國でゞもあるように、私共にとつては現實ばなれのしてゐた淡路島を目前に見て私の心は急に嬉しくなり「おゝ、同胞よ、私達の兄弟姉妹よ、健在なれ！」と私は心のうちに叫び、飽かず眺めてゐました。けれども、暮色がだん〳〵濃くなり、此の島は夕霧に被はれ始めました。太陽は西の空を眞紅にまるで燃ゆるように染めてゐるだけで、其の光りはもう海の上には屆きませんでした。

　その光りもだん〳〵薄らいで、行く手の左に四國のかすんだ山々を見、右は岡山あたりだらうと思へるうれ〳〵した山のかたちを遠くのぞんだ播磨灘で日は全く暮れてしまいました。燈臺であらうと思へる光りが處々にピカリ〳〵してゐるだけで、月の無い海の上は全くまツ暗でした。いやでも應でも船室内に落ち付かればなりませんでした。

　むらさき丸の二等船室は何等の區劃のない隅から隅迄全部見通せる大廣間です。

船客は長々と寢ながら航海するようになつてゐるのでもし、滿員でも充分に手足を伸ばせるようになつてゐるのです。だのに船客は定員の半分位ひですから隨分ゆつくりすることが出來ました。夕飯は五種程副食物の付いた日本食でした。食事のすんだ頃副船長が「どうも御粗末でしたがどうぞ御ゆツくり」と船客の一人々々に挨拶して歩いてゐるので私は其の丁寧さに驚きました。

外はまつくらだし、食事はすんだし、船はやがて高松へ着くのであるから私は其處から端書をうちへ送りたい、どうせ送るなら此の船の繪端書がありそうなものと私の心は頻りに動き始めました。船室の一隅の賄所の前で四五人のボーイさんが――ボーイさんと云つても皆可なりの年輩の人達です――ズボンとシャツだけでどん／＼後かたづけをしてゐましたが、やがて其のボーイさん達の間から矢張りズボンとシャツだけの若い男の人がタオルで手をふき／＼私達の座つてゐる方へ歩いて來ました。私はいきなり此の人に向つて「此の船の繪端書がありますかしら？」と尋ねました。けれども、その人は何だかモジ／＼した樣子をしてゐましたがツイに「私には分りません」と云ひました。鈍感な私が「妙な返事をする」と思つてゐるうちに有島夫人は早くも氣が付いて「あなた、此の方、ボーイさんぢやないことよ。」と仰有つて膝を叩いて「ハヽヽ」と笑はれます。はツと思つてよく顔を見ると成程其の方は私達のすぐ前に奥さんと赤チヤンと一緒に座席を取つて御ゐでになつた青年紳士であつたのです。困つてしまつた私の顔を有島夫人はまともに見ながら、猶もハヽヽハヽヽと笑ひながら「あなた、失禮よ、お客さんとボーイさんと間違へて、ハヽヽハヽヽ」と笑ひます。私は少し負け惜しみが云ひたくなつて「ボーイさんと間違へたつて何にが失禮なの、ボーイさんだつて一つの立派な職業だわ、ボーイさんだつて船長さんだつて同じように今の私達には大事な人ですよ。」

「そんな比較はどうでもあなたが間違へたことは事實ぢやないの、間違へて見れば失禮ぢやないの」さう云はれて見ればもう一言もない、詭辯を弄してごまかすことはもう不可能になつて絶體絶命、そこへヒヨツコリ救け舟を出して呉れたのは、間違へられた人の奥さんでした。赤チヤンをあやしながら絶へずニコ／＼して私と有島夫人の論爭(?)に耳かたむけて居られたが「御間違へになるのは無理もありませんわ、ボーイさんと同じ格恰をしてあんな處にゐるのですもの。」と云つて下さつた。どうしていゝか困つてしまつた私に對する其れは本當に有力な救け船でありました。それは、又、私に對して決して惡感を持つてゐないことの

表白でありました。

　私の胸はスツと輕くなつて、そして、至つて氣安く「何ともどうもすまないことを致しました」と笑ひながらあやまりました。あやまられた人も私と同じように低く頭を下げて「いや、どう致しまして」と、唯面白そうに笑つてゐるし、又、私達の傍にもう横になつてゐた新婚らしい一組みの夫婦も今迄のよそ〳〵しい態度とは打つて變つてニコ〳〵笑つてゐるのでした。で、私は有島夫人に「間違へて失禮をした御詫びに雜誌を差し上げませうかしら、うちの主人がもし必要があるかも知れないと云つて五部ばかり果物の籠の中へ入れて置いて呉れましたから」

　「えゝさうなさいましよ」と云ふ御返事と共に私は雜誌を取り出して一部差上げました。すると其の方が「あゝ、あなたは山田さんでしたか。めづらしい方に御目にかゝれて……」と云ひながら御自分の名刺を一枚取り出してわざ〳〵立つて來て御挨拶されたので却つて恐縮しました。その名刺には日本國民の誰でもが知つてゐる銀行の名が御姓名の横に記されてありました。「どちらへ、別府へですか、御講演旅行かと思ひましたが、あなたは此の頃ブルジョアにおなりですか」この質問に私は、又、一寸困まりましたが、この時となりの若夫婦のうちの良人の方が一寸前に出て行かれたと思つたが歸つて來て「私が事務長の處へ行つて此の船の繪端書を貰つて參りました。さア、澤山御使ひ下さい」わざ〳〵私のために繪端書を貰ひに行つて來て下さつたのでした。そのお禮に、此の御夫婦にも雜誌を一部進呈しました。

　とにかく、こうして私達の周圍は急ににぎやかになりました。婦女界と私との關係に付て質問が出たりして。あやまちの功名とはこんなことでせう。

　ボーイさんが何やら叫んでゐます。耳をすますと「これから下の三等室で餘興が御座います。御退屈な方は御ゐでを願ひます」と云つてゐるのでした。大部分の人は出かけて行きました。けれども私達は座席にとどまつて四國高松から出すために貰つた繪端書に書いたり電報を打つ仕度をしたりしました。餘興から歸つた人の話してゐる處によると、ボーイさん總出で一すし

た芝居や浪花節などがあつたようです。

たちまち船は高松の波止場へ着いて三四十人の人ーーこの人々の中に先刻の銀行の方達もゐたのです――を下し、又、その位ひの人數を乘せて波止場を離れました。波止場に、柿とせんべいを賣るために大聲上げて客を呼んでも誰も振り向きもしなかつた見すぼらしい老人の姿が私の目の底にこびり付いてゐました。

荷物の仕末をして置いて、昨夜以來始めて體を長々と毛布の上へ横へました。隨分疲れてゐたのでぢきに眠つたと見へます。ポー〱と云ふ汽笛に不圖目を醒ますと船は高濱に着いたのでした。午前五時でした。始めての土地だと思ふので甲板に出て見ると高松の棧橋は二ツあるに反して此處は一ツ、燈火の數も高松の半分位ひで、乘り下りする人々も十人を越へない、空を見ると七日位ひの月が星を一ツ伴つて山の端に淋しくひツかゝつてゐました。

私は久しぶりに海の上の夜明けを見ようとしてもう床には入りませんでした。五時半頃になると、四國の向ふ側が白みかゝつて、やがて、それに靑みが加はつたかと思ふと、今迄、底の知れぬまつ黑な怪獸のようにうす氣味惡るくのた打ち廻はつてゐた海の面がさツと明るくなつた。丁度、いぶし銀を流したように。一分二分と待つてゐると、まだ、太陽の姿が何處にも見へないうちにあたりの雲がぱツと紅色に染められた。それを前驅として除々とまツ黑な雲をつんざいて現れて來る光りの色、それは燃へてゐると云つたのでは强さが足りない。「あゝ、此の地上に於ける萬物に生命を與へ、發育せしむる力で太陽はあるものを私の貧弱な言葉で充分形容ができないのは無理もないだらう」と私は自分の持つ言葉數の少ないのをもどかしく思ひました。

とにかく、こうして夜は明け渡りました。目の届く限りの山々はホンノリ顏を赤らめて笑つてゐる。先刻迄怪獸と見へた海は山のニコ〱顏を喜ぶかのように金色をさへ湛へて爽快に踊つてゐる。

そして、それは、伊豫の今治沖でありました。

いよ〱四國を後に豐後洋に出で私達が幾分船の動搖を感じる頃、朝飯になりました。食事がすむと、今

度は船長（だと思ひます）が「さぞ御退窟でしたでせう」と挨拶して廻られたので私達は恐縮しました。船の動揺が止んだと思つて居たら、もう、別府灣に這入つてゐました。私が密かに氣にかけてゐたことは、高松でも高濱でも凡ての下船する客が検便をされたことでした。コレラ菌の入國を防止するために。もし、別府でもさうされるのであつたら厄介だと思つてゐたのでした。處が、幸ひにも、唯、検疫醫が乗客の一人々々の顔を見ることゝ、それから生の食料品は一旦消毒をしなければ陸上げさせないと云ふことでした。

検疫醫を先頭に巡査だの何だの五六人屈竟な男の人達がドヤ〳〵船室に這入つて來て、船客の一人々々の顔を凝視してゐる其の珍しい光景が私には可笑しくて笑ひ出したいのを我慢してゐた處が、トゥ〳〵検疫醫が私の顔をジーッと見すへた時に私はプッとふき出してしまいました。それに引き入れられたように醫者も日にやけた四角の顔をニッとほころばせてしまいました。有島夫人が「まア、顔と顔を見合せてニッコリなんて變ですれ、ハヽヽヽ」（十四頁へ）

（四頁からつゞく）

二十世紀の大問題

何と云ふ恐ろしい言葉であるでせう。が、これは今日迄に除々と實現されつゝあつて、露西亞に於て、殆んど完成を見るかのような觀があります。そして、この狀態を造り出すに付ては凡ての戰爭よりも、凡ての發明よりも、或ひは又、凡ての學問よりも最も有力に働いた一つの機關があります。そして、それは新聞の威力であつたのです。

實に、一般國民が新聞の此の威力に如何に威壓されるか、或ひは、此の威力を如何に利用するかによつて今後の文明の性質が分れます。

人間生活向上のための文明を促進せしむるか或ひは、今日迄の文明を逆轉せしむるかは、この新聞の威力をして民衆を善導せしむるか、民衆を墮落させるかによつて定まる問題です。

新聞の威力程、二十世紀の民衆にとつて重大なる問題はないと思ひます。

「いゝえれ。私はあの醫者ばかりではない。全體の人の格恰がおかしかつたんですけれど、あの醫者にして見れば、こんな色のまッ黑なふとつた奴、コレラの方で逃げ出すだらうと思つておかしかつたんでせうへ、、ー」

笑ひ聲ゝ共に船を離れて生れて始めての九州の地の一角、日光を穏やかに浴びた海岸、名だゝる温泉地、遠い〳〵お風呂場へ、私は足を踏み入れました。大きな〳〵最上に大きな三ツの林檎を波止場に殘して來たのが殘念でした。それが東京を立つ時の主人の心づくしであるだけに一層殘念でした。

編輯の後

「新聞の威力」はもつと長い論文でしたが「東京から別府まで」が長くなりましたので止むを得ず切りつめました。都合がつけば次號に又載せたいと思つてゐます。旅行記も別府に來てからの感想を書きたかつたのですが中途のお話で御らんの通りに長くなつてしまひましたので、これも次號に讓ります。

入湯を始めてから今日で丁度二週間になりますが、階段に足をかけては五分も體が上がらなかつたのが、今では急な階段でなければ十段位ひ上がれるようになりました。ですから、日數をかまはず全治する迄入湯を續けるつもりなら必ず全治すると云ふ確信を今は持つて居りますけれども其れはいろ〳〵の事情が許しません。今月の月末迄入湯を續けてそれから宮崎縣主催の講演會に三日程出席して歸京することに致します、皆樣の御健康を祈ります、（十月二十四日別府市濱脇　泉孫別館にて）

本誌臨時定價表

一册	金十錢	送料五厘
六册	前金五十五錢	（送料共）
十二册	前金壹圓	（送料共）

■誌代及郵税は前金の事■御送金の際は振替貯金東京五三六八八番に御拂込みのこと■郵券代用は五厘切手にて一割増■廣告は御照會次第御相談いたします

大正十四年十月廿三日印刷納本
大正十四年十一月一日發行

東京市四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉
東京市牛込區山吹町一八九
印刷人　大杉直次郎
東京市四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會社
振替東京五三六八八番

[illegible]大正九年十二月二十三日第三種郵便物認可　【定價金十錢】